

大切な神戸が死んでしまう

作家の黒岩重吉(七〇)は、西宮市苦楽園四番町の自宅二階の寝室にいた。就寝したのが午前三時過ぎ、眠りは深かった。異様な音とともに強い衝撃、とっさに目を見開いた。山崩れのような音。家全体が鳴る。「裏山が崩れたのか」「地震やね」向かいの寝室から出てきた妻秀子(六〇)の声が震えていた。黒岩の寝室のドアが開かない。

押し黙ったまま。日が昇った。二人はその場に座り込んだ。パジャマの上にセーターを着て、妻の寝室へ。眼下の住宅街の数か所から火の手が上がる。書斎では三千冊の書物が散乱、書斎全体を埋めていた。二十代のころからいつも手元に置いていた「マルテの手記」が見当たらない。

四世紀の崇神朝から八世紀の奈良朝までの年表と中臣、蘇我氏らの系譜を書き込んだ大学ノート二十冊も行方知れず。執筆中の小説現代の連載小説「天風の彩王―藤原不比等」に欠かせない資料だ。前夜、書いた原稿用紙四枚が机の周囲に散らばっている。急に疲れが出てきた。妻と一階へ下りた。砕けたガラスが散乱していた。足の裏にも小さな破片が刺さった。

テレビニュースは、神戸と阪神地区に被害が集中していることを伝えていた。「すごい地震や」。連載はどうなる。東京の出版社に電話をかける。通じない。

十二年前、堺市から妻が強く望んだ六甲山ろくに引っ越してきた。黒岩も小学校五年の時、この家近くの虚弱児童鍛錬施設で半年間暮らし、岩山で水品を見つけたこともあった。この地にあこがれがあった。その土地の道路のアスファルトはめくれ上がり、破裂した水道管から水が噴き出している。家の壁も数か所にひび割れができた。

「こんなに変わるとは」社会派作家から古代史作家へと転進した黒岩。雄大な構想とつややかな情感で時代に光芒を放った聖徳太子らロマンあふれる人物を次々に創造してきた。

古代を思う時、必ず自然を恐れ、あがめる人々の姿が頭をよぎった。そしてこの地震は、いろんな思いを突き付けた。

「確かにこれは大変な深手だ。だけど戦争のように敵があるわけではない。憤りのはけ口がない」「文明社会のツケがまわった。といってこんなぜいたくな暮らしのシステム作ってたんやし、その分の痛みも深い」――。

黒岩の自宅西約十キロ、同じ六甲山系にある神戸市灘区篠原伯母野山町三の自宅で、作家の陳舜臣(七〇)は妻の未知(六五)と二階の寝室にいた。激しい縦揺れ。「地震よ。目を覚まして」。未知はベッドに寝ていた陳にとっさに布団をかけ、体をかぶせた。「このままじっとしていよう」。陳は静かにいった。未知が黙ってうなずいた。

陳は昨年夏に脳いっ血で倒れ、神戸市内で入院していた。手術の後、五か月間のリハビリを続け、三日前に退院したばかり。階下では食器棚が倒れ、ガラスが散乱。居間の洋酒棚のブランドーやウィスキーの瓶が割れ、アルコールのきついにおいが漂う。冷蔵庫には魚、大根、キヤベツ、ハクサイなどがあつたが、火が使えない。炊飯器のご飯をおにぎりにして食べた。

午後二時ごろ、鎌倉に住む息子のカメラマン・陳立人(四三)が公衆電話から電話してきた。

「大丈夫?」。夫妻はほとんど二階の寝室などでじっとして過ごした。テレビを見ながら、陳の目に突然涙があふれてきた。

「大切な神戸の街が死んでしまう」

うろこの家

塔の高さ13メートル、表面は石張り。1922年建築、木造2階建て(神戸市中央区、1月23日)

